

ああ、直木賞

図書館係 阿部健治

日本の文壇には数多くの文学賞が存在する（筆者が特に好きな、谷崎潤一郎や三島由紀夫の名を冠した賞もあるし、推理作家の登竜門である江戸川乱歩賞などというのものもある。この欄で特集した本屋大賞も近年、かなり重きをなしている文学賞の一つだ。）が、それらの中でも、芥川賞と直木賞は最もポピュラーで、最も権威のある文学賞だと言ってよからう。

両者は年2回、同じ日に発表されるが、その違いを詳しく知っている人はそれほど多くはあるまい。そこで少し調べてみたのだが、これが案外あいまいではっきりしない（例えば、松本清張の『或る『小倉日記』伝』は1952年下半年に芥川賞を受賞したが、もともとは直木賞候補だったのに、候補作の下読みをした選考委員永井龍男のアドヴァイスで芥川賞に回されたとか）のだ。

様々な情報を集約すると、両賞の違いは、芥川賞が「**純文学の新進作家**」、直木賞が「**大衆文学の中堅作家**」を対象とするという「対象の違い」に行き着くようだ。すると今度は「純文学」と「大衆文学（「エンタメ小説」などと呼ぶ人もいる）」の違いは何だということになり、これも感覚的で難しいのだが、とりあえずは、「純文学」＝「芸術性に重点を置いた作品」、「大衆文学」は「娯楽性に重きを置いたもの」と定義できる。

こう書くと、芥川賞の方が価値が高そうに思えるだろう。高校生の頃の筆者はまさにそうだった。1994年に日本人で二人目のノーベル賞作家になった大江健三郎は1958年、東大在学中に「飼育」で第39回芥川賞を受賞したが、当時の筆者にとって「エライ作家」と言えば、この大江や安部公房らであり、直木賞受賞作家たちにはほとんど関心を持たなかった。

しかし、今は違う。若者たちは「人の世のあり方」について怒ったり、理想を語ったりしなくなった。そういうことをすると何か滑稽に見えてしまう、そんな世相のもとでは、多くの人に衝撃を与える若手作家（芥川賞は新進作家が対象だから）は生まれにくい。最近の芥川賞作品で筆者の記憶に残っているのは村田沙耶香の『コンビニ人間』（これはすごいよ！絶対に歴史に残る作品）だけである。

これに対し、直木賞の方は素晴らしい作品が続々と現れるようになった。例を挙げるならば恩田陸の『蜜蜂と遠雷』（第165回2016下半年）である。この話は国際的なピアノコンクールに挑む若者たちを描いた作品である。こう書いただけで中身は想像がつくだろう。まず筆者が思ったのは『ピアノの森』と同じではないか、ということだった。それで3年前の本屋大賞受賞作（恩田のこの作品は直木賞と本屋大賞のW受賞）なのについ最近まで未読だったのである。

本校に赴任して、渋井先生に面白かったと言われたので読む気になったのだが、いったん読み出したら止まらなかった。恩田の凄さは、それぞれが天才であるコンテストたちの演奏の素晴らしさを見事に描き分けていることである。また、1次予選、2次予選、決勝と彼らは3度演奏を行うわけだが、その違いも見事に描き分ける。しかも筆者のように、曲名を聞いても頭の中で音が鳴らない者にもわかるようにだ。これはいくら直木賞レベルの小説家と言っても、そうは書けない、すさまじい力業（ちからわざ）である。恩田は作家となった当初から『蜜蜂と遠雷』の構想を温めていたらしい。この作品はたぶん十年以上の準備期間を経てようやく結実したのである。

こういうものを見ると、若書き（新進作家対象だから）の芥川賞よりも直木賞に注目せざるを得ない。そして、そうした興趣を更に盛り上げるかのように、直近の直木賞、令和最初の直木賞は女流実力派作家の競演になったのである。今回ノミネートされたのは、朝倉かすみ（58）『平場の月』、大島真寿美（56）『渦妹背山婦女庭訓 魂結び』、窪美澄（53）『トリニティ』、澤田瞳子（41）『落花』、原田マハ（57）『美しき愚かものたちのタブロー』、柚木麻子（37）『マジカルグラナマ』の6作品。

7月のこの欄でも言ったように、筆者は原田マハのファンで、実績からいっても本命は原田、対抗は柚木麻子かな、などと思っていた。ところが、ふたを開けてみると、受賞したのはノミネート2回目の大島真寿美。この人は『ピエタ』という作品が2012年の本屋大賞で3位になっているから実力者だとは思っていたが、それ以外は全く知らなかったのだからノーマークだった。しかし、受賞作を読むと会話のうまさが抜群（このうまさは他作でも味わえる。筆者はこの後、大島の『虹色天気雨』とその続編『ビターシュガー』を読んだが、「女同士の友情」が素敵でとても好きになった。この2作既に絶版で足女図書館では買えない。隣の市立図書館にはあるので、是非読んでみて。）で、文章がうまい作品を読み慣れた選考委員たちをも唸らせたらしい。直木賞は作品に与えられる賞で実績に与えられる賞ではないのだ。そんなことはわかっているが、改めて厳しいものだ、と感じた。

直木賞に関しては、これまでも悲喜こもごものドラマが展開されたらしい。前述した恩田陸にしても6回目のノミネートでの受賞だった。最高記録は古川薫という人で、実に10回目のノミネート（1990年下半年『漂泊者のアリア』）で受賞した。未受賞のノミネート記録は長谷川幸延、中村八朗の2名で7回。最近では人気作家の宇江佐真理が2003年上半年に6回目の候補で落選し、2015には亡くなってしまったという例もある。

また、選評の不当性に抗議して人気推理作家の横山秀夫が以降のノミネートを辞退したり、5度目のノミネート（本屋大賞受賞作の『ゴールデンランバー』）で受賞濃厚と言われていた伊坂幸太郎が、憶測記事などで紛らわされたくないという理由でノミネートを取り下げてもらったり（オリンピック代表選考なみのプレッシャーがあるということですね）、と賞の重みを表す事件は尽きることがない。今回、原田マハは4回目、柚木麻子は5回目のノミネートだった。二人とも心を折ることなく直木賞受賞（本屋大賞も）を目指してほしいものだと思う。